四つの原空間
－文化としての建築創作論－

前田哲男

Four Primary Spaces
－Monograph on Architecture for Culture－

Tetsuo MAEDA

Summary

Architectural design which is concerned with human beings, space and time participates in the creation of culture. Architectural space can basically be divided into four styles － decorative space, abstractive space, functional space, symbolic space － and this classification is examined here from the viewpoint of desires that human beings hold. Real architectural space combines characters of the first three styles of space. The fourth space is symbolic. This paper discusses symbolic space which in its eternity will play an important role in a modern society.

1．序

建築作品のあり方を検討するとき、単独にそれだけを取り出して分析する考察では不十分である。なぜなら、閉じられた系の中での問題を解くことは比較的容易であっても、現実の世界は開かれた系であり、建築家の人間性とともに彼の生きている地域やその社会の歴史と、なんらかの関係がすでにそこに存在しているからである。こうした現実を踏まえ建築設計においては、人間・空間・時間という３つの間のあり方を検討すること、これらが織りなす相互依存関係の再編成、つまり「かかわりのデザイン」が重要なテーマになっていると考えられる。

個々の建築作品にはその強弱は別としても、場所性や地域性とともに、建築家の趣味やその個性が観察される。価値観の多様化に伴って多種多様な建築作品が誕生してきている。しかしどんな個性的な作品であっても、優れた建築作品であれば、それから受ける感動は国境や時代を越え、その波動を広げていく。こうした本物の優れた建築作品には、場所性や個性という特殊性とともに、民族や国や時代を超えた普遍性、様々な文化の底流に存在するある普遍的なるものが備わっていると思われる。建築設計において自由奔放な想像力が必要とされてはいるが、貴重かつ賞賛されるべき独創的な仕事には、見えがかりの新奇さや異風に流されることのないある普遍性が宿っていると考えられる。価値評価の妥当性は真理認識のように普遍的ではないが、それでも過度の相対主義に陥らないために、普遍妥当性への探究は避けて通れないものである。

さらに現代は、偏狭な民族主義や国家主義に対して、国際化ということが叫ばれている時代である。しかし、国際的な視点は重要ではあるが、国際化によって文化の多様性を消滅させようということでも、自国の歴史や伝統的文化を軽視あるいは無視しようということでもない。普遍性の尊重が文化の多様性の消滅に直接結びつき、将来ひとつの様式に統一されると考えることは、あまりに単純化された図式を信じることになる。小住宅の設計のように、現実的で特殊な問題を徹底的に追求しても、創作活動中にそれが突然反転して、普遍的な価値に転化することもありえると考えられる。普遍性の尊重といっても文化の多様性を否定することではない。

現代日本社会の行き詰まり状況を見ると、物質文明の豊かさに対し精神文化は衰弱し、価値観は混迷をきたし、閉塞感が漂っていると思われる。この閉塞状況を打開し変革するためには、変革期にふさわ

しい考え方が必要とされている。建築設計は人間・空間・時間に直接かかわり、文化創造に参加するものである。事実関係以上に意味本質を問うことで、造形と思想とを媒介する「文化としての建築創作論」を構築するため、本稿では人間精神のあり方に対応する原空間、空間的表出を構造的に可能とする形式としての原空間を４つに整理し、意味や価値への人間の関与の仕組みから、それぞれの原空間を考察することを目的とする。

２．欲望相関的な観点と装飾空間

人間の存在とはどういうものなのか、人間が生きているかぎり、それぞれの人間にその人固有の「生の世界」が存在するということを、ドイツ哲学者ハイデガー（1889-1976）は、『存在と時間』の中で、「世界内存在」という語を用いて表現している。ここでの「世界」は客観的な宇宙や地球や自然ということではなく、個々の人間、個人によって具体的に生きられている世界ということになる。人間は様々な関心、つまり欲求や欲望とともに生活を営んでおり、その欲望実現のための目標に応じて解釈された世界、その有益性・利用可能性の視線が作る世界が、人間一人ひとりにある。つまり人間は自分自身の回りの世界をつねに対象化しつつ生きている。人間には様々な欲望があり、その欲望に基づいて回りの世界を対象化し、対象化されたものに関心を向け、配慮を払いながら生きているということである。

この配慮的な気遣いによって、身の回りの物はその有用性から道具として扱われる。そして人間は利用価値のある道具として対象に関心を示し、この対象との距離を近さや方向によって見はからっている。ハイデガーは、「現存在は、内世界的に出会う存在するものとの配慮的＝親近的交渉という意味で、世界の「内に」存在するのです。したがってもしなんらかの仕方で現存在に空間性が属しているならば、このことはただこの内・存在に基づいてだけ可能です。しかし内・存在の空間性は、距離を取り去ることと方向を決めることという両性格を示しています」[1)]と語っている。

人間が世界を対象化する際に用いられる欲望は、東洋思想では煩悩と呼ばれ、食欲・色欲などの本能的欲求と所有欲・出世欲・名誉欲・権力欲などの社会的欲求である。これらを追求し、獲得することが人生の理想であり、目的であると確信し、ひたすらこれらの欲望の充足に向かい、そしてこの欲望が満たされたとき、人間は一時的な満足感を得ることができる。この欲望の実現を求めた、本能的・肉体的な空間、人間情念の作業によって作られた空間には、多くの場合、図像的な要素つまり具象的な形を伴った装飾が施されることになる。ここに一つの原空間としての装飾空間が登場する。植物の愛好者が室内を植物の形や色で飾りたてるなど、鑑賞を通して自身の欲望を満たす、対象としての装飾空間である。

さらに、無味乾燥な何もない空間に装飾を施すことは、人間にとってその空間を自身の支配下に置き、自身の所有物とする行為である。そして自身の欲望に形や色や空間を与えるその技法には、様々な修辞方法が見られる。欲望は人間にとって根本的でその姿は多様であり、装飾は様々なあらわれ方をしている。しかもこの装飾空間は人類の誕生から観察され、この意味で始源的空間であるとも言える。そして、生きている人間は確実に欲望に突き動かされており、この装飾空間は至る所に出現している。生きられた空間や生存本能に基づく空間の多くは装飾空間であり、また購買意欲をそそるために開発された商品としての家具や住宅、さらに欲望の渦巻く大都会の歓楽街では装飾が加算され、こうした装飾空間がもてはやされている。

３．虚空と抽象空間

自分と自身を含む環境が恵まれている場合、変化しないこと、永遠であることを人間は欲する。しかし、形あるものはいつかは崩れ、物質やそれによって構築された空間も、すべて泡沫、幻のようなもので、一つとして確実なものはない。また財産にしても、地位にしても、名声にしても、これ以上にはかないものはない。さらに時代の傾向性といってもこれがいつまで続くか確かではない。永遠に変わらない固定的な自分や環境はないと言える。このように一切のものが虚像で無常であるのに、恒常であって欲しいと願い、それを固定化し、不変なるものと錯覚して、それに執着するから、つまり自分や自身を取り巻く環境への我執から離れられないから、そこに人間の苦悩が生じると言える。大切な建物や人を失うことは、人間にとって辛い体験である。

欲求や欲望の多い人間は利益を追求することが多いから苦悩もまた多い。このような苦悩から逃れるためには、誘惑に打ち勝ち、多欲を節制するしかないと言える。

ところで、人間の生は誰にとっても一度きりのものである。他人と取り替えのきかないものでもある。同時に死は確実にやってくる未来でもある。人生に明日はなく、どうなるのか分からないと考えたとき、この一瞬一瞬を快楽の淵のなかに埋没させようとする刹那主義や、快楽の追求のみを生きがいとする快楽主義の生活態度がある。このとき生活空間は装飾空間の様相を呈する。

一方多くの平均的人間は、日常生活において死のことを忘却している。しかし、死を自覚するとき、人間はこの世界に存在しているすべてのものをまっ

たく新しい目で見ることができる。さらに、ハイデガーが主張しているように、死を深く自覚することにおいて、それが本来的な人間の生き方のきっかけになると考えられる。ここでハイデガーの哲学では、自分自身の内部から、自分自身に向かって、本来的な自己自身であれ、と呼びかける良心が問題にされる。「良心は関心の呼び声として明らさまになります。すなわち呼ぶものは、自分の存在可能のゆえに、被投性のなかで不安がっているものであるところの現存在です。呼びかけられたものもまさにこの現存在であって、それはその最も自己的な存在可能へ呼びおこされたものとしてのそれです。しかし現存在はひとへの転落から、呼びかけることによって、呼びおこされるのです」[2] と語っている。一方、死を深く自覚したとき、東洋思想では、世界で起きている現象の根本的原理として、無常なるものが問題になってきている。生も死も無常である[3]。

死を乗り越えようとする生き方、この無常感と平行してあらわれてくるひとつの生き方が、自己を厳しく制御し、身体的感情的な囚われからの脱却を目指す禁欲主義であり、それは快楽主義と対極にある。

カントは『判断力批判』の中で、美の分析論、趣味判断の第一様式―『性質』において「我々が対象の実在に結びつけるところの適意は関心と呼ばれる。それだからかかる適意は同時に欲求能力に関係する－中略－何か或るものが美であるか否かが問題となる場合に我々が知ろうとするのは、そのものの実在が我々にとってなり或は誰かほかの人にとって実際に関心事であるのかどうか、或はそうでないまでも関心事になり得るかどうかということではなくて、我々が単なる観察においてこの物をどう判定するかということである」[4] と語っているが、禁欲主義による造形は、無関心の関心というこの美的判断を尊重している思想であり、高潔な心に基づく美徳を求めようとする造形行為であると考えられる。

関心や欲求や欲望の否定に基づく造形は、形を消すとか形の持つ歴史的意味を排除する、さらに純粋性を求めるといった造形行為となり、具象的な装飾空間ではなく抽象的で無機的な空間、ウエットではなくドライな空間を生み出ことになる。ここに装飾は罪悪と見なされ、欲望へのこだわりを遠ざけた、禁欲主義に基づいた無色透明な虚の空間、数学的分析に基づく計測可能な座標空間とは別次元の空間である、虚空へ向けた造形意志が登場する。これは、人生の苦の原因となる煩悩を徹底的に断じ、無苦安穏、静寂で純潔な境地を得ようとする造形行為である。そして、この否定の先行する造形行為の行き着く先の一方には、俗世間のわずらわしさからの完全な逃避を試みる厭世主義が、また他方には、人間の持つ生命力を完全に否定し、生きる意味を見失わせる虚無主義の空間が控えている。

人間が抱く欲望には様々なものがあり、余分なものと思われるものも多い。無駄なものを剥ぎ取る純粋化、レス　イズ　モアを志向する造形行為は、具象的な形を否定すること以外にも様々なレベルで考えられる。素材の持っている材質感を否定し、中性的な材質感の材料を使用する造形行為。間仕切りや仕上げの施されていない、架構が露出された状態を理想とする造形行為。人間は厚い壁で囲われた閉鎖的空間で、保護された安心感を得ることができるが、壁の存在感を消そうとする造形行為。大気中の原子のような行動の自由さを目指し、空間そのものの囲いを消去し、空間ではなく開かれた場の連鎖を形成しようとする造形行為。恣意的なデザインを否定し、浮遊する記号のありようを求める造形行為。歴史的な意味による全体的な統一を否定し、沈黙した建築のありようを求める造形行為。建築は政治や経済とも関係し、様々な思想や哲学の影響を受けてきているが、こうした影響を断ち切り、建築論を建築領域の中だけで完結させようとする行為。言い換えると芸術のための芸術、建築のための建築を目指す行為。こうした様々な造形行為によって、欲望の渦巻く装飾空間とは別種の空間が出現してきているし、新たな空間が出現する可能性がある。

ただ、否定が先行する崩壊と消滅への愛着つまり厭世主義や虚無主義の極限状態は、建築を造形していこうとする意志そのものを否定することにつながり、こうした空間は現実には存在しない。しかし、こうした極限状態、完全なる虚空を究めようとする造形意志は、存在していると考えられる。

しかし、虚空の世界は、有無を離れそれを乗り越えた世界でもある。宇宙空間における生命誕生の現象に思いを馳せると、宇宙自体が生命を誕生させる力を内包した生命の海であり、宇宙の無の状態は有への可能性を秘めた状態であると思われる。虚空は、何ものも存在していないという無の世界ではなく、無限の可能性やエネルギーを秘めた世界、すべての存在や活動を入れる無窮の場であるとも考えられる[5]。形を消すという造形行為は、もう一方で、形ないものに形を見いだそうとする東洋文化の象徴性へとつながっている。

4．相互主観性と機能空間

人間が自身にとって自由にならないもののひとつは死の問題であり、もうひとつは他者の存在である。人間は世界から隔離され、孤立した存在ではなく、社会的な動物であり、他者とともにある存在であり、ハイデガーも「現存在は本質的に共同存在であるという現象学的言明は、実在論的＝存在論的意味をもっています」[6] と語っている。建築設計における表

現とは決して個人に属するものではなく、他者に見られ、体験されることによって完成すると言える。

否定という造形意志の先行する抽象空間は、厭世主義や虚無主義に陥るきっかけを提供してくれる。この厭世主義や虚無主義に陥らないためには、他者への関心が不可欠である。都市では無関心の砂漠が広がり、無数の核家族の扉が閉じているのが現代である。また巨大な機構の中で、機械の歯車のごとくに、諦め感を抱きつつ生きているのが現代人である。こうした現代社会における疎外感を克服するために、他者と積極的にかかわり、他者を真に理解し、他者との連帯を構築することは有意義な作業である。つまり本当の生き方への深い自覚は、個人的なものに終わらない。一切のものが無常であり空であるからといって、厭世主義や虚無主義に陥ることはない。人間としての自己完成への道と社会的実践の道が存在していると考えられる。

自己中心的欲望ではなく、社会の調和と公益を目指す願望による空間、建築家の社会貢献が主調となった空間、思いやりに基づく他者のための空間、利用者などその建築にかかわる人々の身体的・心理的快適性を目指す機能空間がここに登場してくる。

民衆の暮らしの中の実用性に注目した、合理的計画に基づく機能空間は、身体的にも心理的にも心地良いものになる可能性が高い。機能主義というのはあらゆる他者の立場に立ち、その他者が快適に生活できるために、もっとも機能的に無駄なく計画することである。建築のみならず、その社会的関心から、都市問題の解決をともなった近代的都市空間が生まれている。しかし、都市計画法で求められている都市の空間像は、心身ともに健康的でさらに勤勉で機械的な住民を想定してはいるが、矛盾に満ちた社会の中で苦悩し、それでも思索し挑戦し感動する人情味のある庶民の生活空間像とはずれている。都市計画法上矛盾に満ちた都市空間の中でも、庶民は生き生きした生活を営んでいる場合がある。行政に依存した住民ではなく、自律した住民による横の連帯が求められているが、現代的なコミュニティの形成のためには、都市機能をどのように制御するかということ以上に、住民一人ひとりの自律が不可欠である。

また、快苦の感情と関係するこの快適性の追求は、物質的な生活の豊かさとともに人間の欲望とも関連する。快適性の追求には、欲望の追求と同様に際限がなく、合理的視点や経済性の枠組みがはずされ、快適性の質が考慮されなくなったとき、そこには享楽への道、快楽主義の落とし穴が待っている。たとえば最小限住宅や住戸面積の小さな公的集合住宅の設計は、都市において住まうことの本質を見極めようとする機能主義であり、このテーマは建築家の教育課程において重要な訓練になる。しかし、最小限という制約条件がはずされたとき、住まいに対する欲望の氾濫が引き起こされる可能性がある。

また現代社会において、新たな制度や機構に対応した機能空間が生まれてきている。特に少子高齢社会において福祉関係の施設の種類が増加し、また様々な複合施設が生まれてきている。ただ、いくら制度や機構をいじって新たな機能空間を創出しても、それを運営する人間が旧態依然で変わらなければ、社会は良くならない。たとえば、状況に合わせた臨機応変の対応ができず、賃金と仕事との明確な契約関係を求める機械的人間には、グループホームの運営は困難であろう。この意味で人間の内なる変革を先に考えること、他者とともに人間としての自己完成の道を進むことは重要であり、ここに、機能空間を越える空間が、現代において重要になってくると考えられる。

5．生命力と象徴空間

死への自覚において本来的存在になろうと決意し、理想的な目標へ向かって、他者とともに、矛盾に満ちた現実社会の中で実践的に道を求めるとき、人間は全体的かつ本来的な実存の可能性を得ることができると思われる。たしかに本能的な欲望のままに生み出された装飾空間には、生きるということへの肯定的なエネルギー、つまり人間の持つ生命力が感じられる。しかし、高度に技術文明の発達した現代社会において、利己的な欲望に基づく利害の衝突は様々な弊害をもたらし、欲望の制御は不可欠である。

抽象空間も機能空間もともに装飾空間の否定という性格を持っているが、行き過ぎた欲望の否定による意欲や生命力の喪失と、際限のない快適性という欲望への道が待っている。ここに３つの空間の円環が閉じることになる。つまり、個人的自我にかかわり欲望の肯定による装飾空間と欲望の否定による抽象空間。さらに普遍的自我にかかわる機能空間である。ただ、人類の歴史において、装飾空間から抽象空間さらに機能空間へと進歩してきたということではない。どんな建築空間であってもこの３つの空間の性格を保持しており、建築家や住み手や使い手の造形意志の方向性によって、その建築空間の主調が決まると考えている。

そして、この円環から脱するものとして象徴空間が出現する。ここで象徴空間とは、感性的なものを本来含まない理念に対して、間接的な形で与えられた類比（感受性的な図像）による空間である。欲望渦巻く世界にありながら、それに引き込まれることなく、つねに人間性豊かな自由の立場を保持する空間であり、超近代的な技術と象徴的なるものは対立するものではない。

普遍妥当性を人々に要求できる芸術の役割は、世

界とその現象の本質を作品の中に作り出すことであると考えられる。この意味で、芸術のための芸術や建築のための建築ではまだ不十分である。象徴空間は、理念と現実との乖離に対して、欲望の渦巻く現実社会での実践によって、回復すべき理想を目指した空間である。つまり象徴空間は、人間本来の生命感の回復、衰弱した生命を増幅させること、人間の持つ無限の可能性への共感、その造形が人間を衝撃し、思想と生活を変革するといったことを目指す空間であり、意味の発生や価値の創造を通して、人間と空間との本来的な生きた感情の交流が期待される空間である。こうした空間を造形する行為は人間精神の闘争であり、この空間はこうした闘争によって生まれたきびしい象徴化の結果である。不断の自己鍛錬によって高貴で強靱な精神を強めたときに生まれる空間である。

ただ当然、装飾空間や抽象空間、さらに機能空間が象徴性を帯びる可能性は大きく、象徴空間の具体的な姿を固定的に表現することは困難である。この意味で、象徴空間を設計する手法ではなく、その意味内容、建築デザインが析出されてくる地層に位置する思想の枠組みが重要であると考えられる。

6．形式美と内なる美

人間は歴史の中にあるのではなく、歴史というものを作り出されずにはいられない動物である。ハイデガーは「現存在の歴史性の分析は、－中略－現存在が、その存在の根拠において時間的であるからこそ、歴史的に実存し、そのかぎり実存できるのだ、ということを示そうと努めるのです」[7]と語っている。空間だけではなく時間も人間自身の内部に現象し、我々は歴史に引きずられている。

我々の建築史には様々な象徴空間が記録されてきている。たとえばフランスのルイ14世（位1643-1715）はヴェルサイユに壮麗な宮殿を建設している。その宮殿の世界では、豪華な装飾とともに、比例に基づくプロポーションや左右対称性、さらに焦点や軸性と入った形式美が支配している。中心や焦点を鮮明にする形式美は、現代においても象徴空間を作るときの明確なる設計手法である。しかし、権力が王に集中した時代の歴史を見たとき、形式美に纏わるこの強烈なる権力欲には、反感の念さえ引き起こされる。

美醜や利害や善悪は、主観の相違によって好悪の差を生じる。それらを感受し判断する人間の持つ知情意はどれもが必要であり、この象徴性の感受と判断はこれらの能力の総合としてあらわれる。現代求められている象徴空間は、闇のイメージにつながる深層心理学的空間でもなければ、偶像崇拝的な空間でもない。ましてや権力欲による象徴空間でもない。現実の泥沼の中で苦悩し、それでも未来に向けて企て身を投げ出す、つまり企投する人々がつくる、企投としての象徴空間である。

ものや建築様式に規則や法則性を求めるつまり形式美を追求するのではなく、人間精神の自由を求めて、人間に内在する普遍性を究めるべきである。カントは感嘆と畏敬の念をもたらすものとして、星をちりばめた空と私の内なる道徳法則を挙げている[8]。技術文明が高度に発達している現代においても、大宇宙と生命（小宇宙）は、二つの未知なるものである。たとえば宇宙の誕生と膨張という課題は、日常的な時間・空間感を打ち破るものである。また生命現象とくに精神現象についても分からないことが多い。意識を脳内の物質的現象として説明することができても、その説明はまだ不完全である。なぜなら物質的現象と意識とは直接には結びつかないからである。また良心を叫ぶ小さな人間が、脳の中に住んでいるわけでもない。この大宇宙と小宇宙を深く自覚したとき、有限の世界、経験することの可能な世界に留まりがちな人間の常識的な感受性が破られ、抑えつけられた精神を解放し、人間性を開花させる。そして、我々の悟性に基づく理論的能力の内に見出すことのないような法則、宇宙と生命を貫く法則とその目的に出会うことになる。

カントは美と崇高に関する判断について、普遍妥当性を人々に要求できる根拠として、そのときの人間心理状態を「美学的判断力は、美の判定においては、自由に遊ぶ構想力を悟性に関係させて悟性概念一般と調和するし、また或る物を崇高と判定する場合には、この同じ構想力を理性に関係させて理性理念と主観的に合致する」[9]と表現している。

この主観的根拠に基づいて自然美や崇高を感受し判断するということは、内なる生命と、自然や宇宙の大生命との共鳴、その合法則性と目的、さらにそれらの可能性を感受することであり、生命の持つ無限の可能性を感受したとき、深い心の中から無限の歓喜が湧き出てきて、それを我々の言語で美や崇高と表現していると考えられる。

しかしこのことは宇宙の現象の最高根拠、第一原因による他律を望むことではない。「美学的意味における精神とは、心意識において生気を与える原理のことである。そしてこの原理が心に生気を与えるために用いるところのもの、即ちこの目的のために使用するところの素材は、心的能力を合目的に活動させるところのもにほかならない、―換言すれば、心的能力はこうして自由な遊びを始めるのであるが、この遊びはそれみずから自分を保持しつつ、心的能力のはたらきをも強化するのである」[10]　とカントは語っている。この美や崇高を感受できる境涯に自身を高めること、つまり自己開発によって心的能力

の働きを強化することが大切である。このためには、現実の苦闘に対し何度でも挑戦していこうとする強い意志が必要であり、価値の創造を通して、人々を鼓舞する空間が、企投としての象徴空間であると考えられる。

7．内なる美と永遠性

だれでもが永遠なるのもを感じる能力を持っている。建築が物質的に持続する永遠性だけではなく、一瞬の出来事の中でも永遠を感じることができる。この点ですべての人間は平等である。この永遠なるものや永遠なる法と目的を感じる能力は、生命の尊厳を感じる心であり、人との絆を貴ぶ心であり、自然・宇宙と共鳴していく力である。

永遠なるものや永遠の生命を感じることがなぜ重要か。永遠の生命を知ることは、宇宙的・普遍的自我に目覚め、人間の生きる目的を見極めることであり、それによって個人的自我を克服し、自然界の構成原理と考えられる、多様性と相互依存関係に基づく調和を真に求めることができるからである。そして企投による象徴空間は、多様性と調和が作る生命の永遠性を表現することを目指すものである。

「美は道徳的善の象徴である、また美はかかる関係においてのみ我々に快いものであり、兼ねてまた他のすべての人の同意を要求するのである、それと同時に我々の心は、感官的印象による快の単なる感受を越えて或る種の醇化と高揚とを意識し、また他の人達の価値をも、彼等自身の判断力の格律に従って尊重するのである」[11] とカントは語っている。

人間的生を創造する方向に、生き生きと自由に発動させるものとして、人間生命内奥の衝動的エネルギーとして、他者とともに人間が人間らしく生きたいという本質的願望が存在している、と考えられる主観的必然性がある。それは宇宙生命との共鳴を求める願望であり、人間生命全体の感情に生の脈動を伝え、その高揚や昇華をもたらす内なる美の世界を求める願望である。社会的実践の中で美や崇高を求める願望は、我々の心を開発すると考えられる。

欲望につき動かされる人間がその欲望を否定するのではなく、欲望を制御し、この矛盾に満ちた社会を是正するため、新たな価値の創造を通して、何度も戦うという覚悟が内なる美を尊重する本質的願望である。

建築の創造は高度な精神作用であり、建築家の持つエネルギーが何らかの作用で空間を作ることになる。内なる美の問題は人間の自己開発と社会の問題と関係する。偶然性や運命に責任を転嫁するのではなく、すべてについて自分自身が責任を持っていることを自覚し、人間的資質の向上のために用いる価値を刺激する。人間生命の払拭しえない要素である欲望を方向転換させ、欲望の方向を自己から宇宙へと向け直す。宇宙つまり全生命的存在と自己との一体感に達し、生命の永遠性を悟った完全かつ永遠の満足、生きること自体の喜び、生の歓喜の世界を志向するものが企投による象徴空間であると考えている。人間の内面的象徴から練りあげられる建築空間である。

8．結　論

建築家の設計活動は経国済民という経済的活動ではあるが、同時にそれは単に人間の関心や欲求や欲望の充足を目指すものではなく、大地を耕し人間精神を耕す、芸術・文化的活動でもある。人間は機械的存在者や動物的存在者を目指すのではなく、有限の理性的存在者を目指すべきである。理性的存在者といっても、超越的存在者や超人間的な絶対的存在者ということではなく、だれでもがなれる存在者である。だが、欲望に突き動かされる人間にとって、その状態を常に維持していくことは難しいと思われる。しかしそうであっても、現実社会の中で、理性的存在者であることを常に維持することが困難であっても、意志の方向性を逆戻りさせることはないと考えられる。このとき、人間・空間・時間の３つの間の理想的な関係を、それぞれの現実社会の中で構築することは有意義な作業である。空間や時間は人間自身の内部に現象し、人間の抱く関心や欲求や欲望と関係する。現実の建築空間は装飾空間・抽象空間・機能空間の性格を保持しており、これらを越える空間として企投としての象徴空間を目指すべきであると考えている。そのとき考慮される、内在的普遍性の追求、内なる美と永遠性の表現、多様性の尊重と相互依存関係に基づく調和は、既知の社会を超出する建築表現の可能性を求めるとき、重要なテーマであると考えられる。発想の根源において、現代の世界に生存している人間の状況に直接向き合い、現存するものの生の意味の組織化を通して、地域の伝統の継承や作家の個性が、世界に通用する普遍的なるものを象徴するとき、人間としての共通の基盤との共振、異なった性質のある相互連関的な和が実現していると考えられる。またこうした創作活動は、世界の諸文化の多様性と、個人の自律、自律した個人が、不撓不屈の勇気を伴って作る連帯こそが重要であり、集団に応じて色彩を変える自分しかない人々の作る社会の危うさを回避できる思想につながり、美しい景観をともなった豊かなコミュニティ作りの原動力になると考えている。

註

1) ハイデガー：存在と時間（上）、桑木務訳、岩波書店、東京（1960）、p.201
2) ハイデガー：存在と時間（中）、桑木務訳、岩波書店、東京（1961）、pp.281-282
3) 小林秀雄は『文学界』に発表した「無常といふ事」（1942年6月）　の中で、生死無常と書かれた『一言芳談抄』の一節を紹介している。
4) カント：判断力批判（上）、篠田英雄訳、岩波書店、東京（1964）、p.72
5) 鈴木大拙は『心』に発表した「自由・空・只今」（1962年11月）の中で、空の思想を「零イコール 無限」と表現している。
6) ハイデガー：存在と時間（上）、p.231
7) ハイデガー：存在と時間（下）、桑木務訳、岩波書店、東京（1963）、p.139
8) カント：実践理性批判、波多野精一・宮本和吉・篠田英雄共訳、岩波書店、東京（1979）、p.317
9) カント：判断力批判（上）、p.164
10) カント：前掲書、p.267
11) カント：前掲書、p.337